

「研修会等名称」

異文化間教育学会第46回大会

場所：東京大学

期間：6月21日～22日

1. 研修の内容

本大会は、国境を越えて移動したり、複数の文化的背景の中で育った人々に対して、どのような教育が求められるかをテーマに、シンポジウム、特定課題研究発表会、そして多数の個人・共同発表が行われた。

私は、多様なバックグラウンドを持つ学生が受講する言語関係の授業を複数担当しており、異文化間教育分野の理論や事例研究を学ぶとともに、他大学における実践例を参考にしたいと考え、本大会への参加を決めた。

大会のプログラムは非常に充実しており、同じ時間帯に聴きたい発表が重なることもあったが、最終的に以下の発表・セッションに参加した。いずれも有益な内容であったが、とりわけ印象が残った発表（「★」が付けたもの）を取り上げて説明する。

◆ 6月21日（土）

・ 9:30～12:00 特定課題研究発表：発達の視点から異文化間で育つ子どもの経験を考える

①海外の日本人学校に通った子どもは自らの経験にどう向き合ってきたか

②国際結婚家庭で育った子どもが抱えた葛藤とその解消

—大人として振り返る発達の視点からの振り返り—

③日中間移動を含む中国人元大学院留学生のライフストーリー

—留学・就労・子育てとの両立を中心に—

・ 12:00～13:00 ネットワーキング交流会

・ 14:00～14:30 個人発表（異文化理解会場）★1

中国系移民第二世代が語る「学校から仕事への移行」

—インタビュー調査の結果から—

・ 14:35～15:05 個人発表（異文化理解会場）

異文化間関係形成におけるソーシャル・スキルの効果に関する研究

—在日中国人への質問紙調査を通して—

・ 15:10～15:40 個人発表（異文化理解会場）

唱歌教育のコロナゼーション的視点からの再検討

—西洋音楽の覇権と異文化間教育の視点から—

・ 15:50～16:20 個人発表（多文化教育会場）★2

日本における中華系移民教師の教育実践とエスニック・アイデンティティの交渉

・ 16:25～16:55 個人発表（多文化教育会場）

多文化教育の視点から見た多様性尊重と学校文化の葛藤

ー外国人散在地域の公立中学校を事例にー

◆ 6月22日（日）

・ 9:45～10:15 個人発表（多文化教育会場）

単一の権力構造に着目した多文化教育と複数の権力構造を取り上げた多文化教育の授業実践の比較分析ー「マジョリティ特権」「多様性の尊重」「社会参画」を視点としてー

・ 10:20～10:50 個人発表（多文化教育会場）

共生社会の構築に向けたアドボカシーの重要性に関する一考察

ー地域における日本語教室や生涯学習講座の現場の事例を踏まえながらー

・ 11:05～12:05 共同発表会場 ★3

異文化間のコミュニケーションと教育におけるクリティカルアプローチの展開

ーインターカルチュラルリティ・クリティカルリティ・リフレキシビリティを中心にー

・ 13:00～16:00 公開シンポジウム ★4

グローバル・シティズンシップを問う

ー異文化間教育学は民主主義にどのように貢献できるかー

以下に「★」を付けた内容について説明する。

★1 中国系移民第二世代が語る「学校から仕事への移行」ーインタビュー調査の結果からー
（発表者：劉麗鳳（日本大学））

この発表は、中国系移民第二世代が語る「学校から仕事への移行」をもとに、若者たちはエスニシティ活用志向が初職達成後、どのように変容するか、あるいは変容しないかを明らかにし、その背景要因を検討したものである。ここでの「エスニシティ活用志向」とは、中国系移民の第二世代が職業選択や就労の場面において、中国語や中国ルーツを活用しようとする志向性を指す。発表では、日本の高等教育を修了したのち、就職活動を経て正規または非正規の仕事に就く経験を持つ15名の中国系移民第二世代へインタビューした結果が紹介された。

そのうち特に注目したのは、「中国系第二世代のエスニシティ活用志向は、高校卒業後の進路選択を契機として芽生え、その後の大学経験を通じて強まっていた」という結論である。家庭内での教育的資源が不十分という不利な環境であっても、エスニシティ活用志向は「大学進学アスピレーションを高める役割を果たしていた」ということで、大学における適切な教育や環境づくりの重要性を示唆した。例えば同じ移民ルーツの若者と出会ったり、中国への留学やサークル活動などの経験を通じて、エスニシティ活用志向が強まる結果が示された。

しかし一方で、初職達成後、エスニシティ活用志向は維持型と衰退型に分岐していった結果も見られた。エスニシティ活用が可能な初職の達成、トランスナショナルな繋がりといった要因は、エスニシティ活用志向の維持に役立つものの、「差別や偏見からの回避」、「言語的・職業的要因」で中国語や中国ルーツの活用意識が抑制されたこともあった。

この研究では、中国系移民の第二世代に対して具体的にどのような教育が有効なのかに

については言及されていなかったが、発表後の質疑応答セッションにおいて、発表者に質問したところ、エスニシティへの積極的な意味付けを行うの重要性や、エスニシティをどの程度強調するかといった点で、学生本人の意思を尊重する姿勢が重要であるという回答を得た。

★2 日本における中華系移民教師の教育実践とエスニック・アイデンティティの交渉

(発表者：山田江理子(東京大学大学院教育学研究科D))

この発表では、日本の学校における5名の中華系移民教師を対象とし、排外主義的な学校文化や制度がある中で、移民教師は自身の多文化背景を開示、または活用した教育実践が制限される中、移民教師たちの教育実践とエスニック・アイデンティティの交渉プロセスを検討した。結果、対象者の来日経緯、被差別経験、スティグマの内面化により、かれらの教育実践とエスニック・アイデンティティの交渉プロセスは異なるパターンを示した。ただ、スティグマを内面化した対象者でも、それを乗り越える自己承認の資源を得られた場合に、自身の多文化背景を活用した教育実践を模索することができている。例えば、教材に自身の背景を開示した例文を組み込んだり、生徒からのステレオタイプや偏見を解消しようとする実践(中国ミニ講座)を行ったりする教育実践が紹介された。

本発表の調査結果によって、「自己承認の資源」になりうるものとしては、「外国」に寛容な学校文化や管理職からの励まし、他の移民教師の存在、そして中国語の活用機会が挙げられた。制度的支援の不足は依然として、移民教師の多文化背景を活用した教育実践を制約する大きな制度的・文化的障壁であることも説明された。

★3 異文化間のコミュニケーションと教育におけるクリティカルアプローチの展開ーインターカルチュラルリティ・クリティカルリティ・リフレキシビリティを中心にー

(発表者：杉原由美(慶應義塾大学)、オーリリチャ(武蔵野大学))

この共同発表では、海外と日本における高等教育の異文化間コミュニケーション教育実践および、武蔵野大学において多様な背景を持つ学生に向けた言語文化教育の授業実践が紹介された。

この授業は、「批判的異文化間コミュニケーション研究・教育学」の枠組みに基づいてデザインされており、文化の複層性に注目しつつ、動的な関係性を構築することに重点が置かれている。例えば授業では、NIKEの物議を醸したコマーシャルや、大坂なおみ選手に関する記事など、文化的アイデンティティを認識するきっかけになるものを取り上げ、多言語によるグループディスカッションを通じて、学生の言語能力を鍛えるのみならず、文化に対する葛藤や文化的特権への気づきを促し、文化およびアイデンティティをより深く思考させる授業内容となっている。実際、受講生へインタビューした結果からも明らかになったように、受講初期は「違和感と問いかけ」が生じるが、学びが進むにつれて、文化に対する「文化に支配されている」、「文化は柔軟で決定論的でないもの」などの気づきが生まれ、「リフレクシブな洞察と批判的自覚」へ繋がっている。

★4 グローバル・シティズンシップを問うー異文化間教育学は民主主義にどのように貢献できるかー(講演者：Gary Mukai(スタンフォード大学 国際・異文化間教育プログラムフリーマン・スポグリ国際研究所 所長))

シンポジウムでは、日系アメリカ人である講演者の経験ならびに、19世紀後半から20世紀初頭、第二次世界大戦中にかけて、在米日本人とその子どもたちが経験した出来事に基づき、8つの視点から「グローバル市民であるとはどういうことか？」について紹介された。以下、①～⑧は講演者が明言した「グローバル市民」に関する項目であり、その項目に至るまでの説明を括弧内に示す。

- ①文化的感受性を持つこと、「他」に対して共感できること
(19世紀中期から米国への中国系移民、中国系鉄道労働者に関する説明)
- ②自らの文化的価値観と偏見を認識すること
(第二次世界大戦中、敵性外国人と認定されたこと、収容所に抑留された時の所持品)
- ③歴史的理解の重要性を理解すること
(日系アメリカ人としての参戦)
- ④多様な視点を尊重すること
(戦時、ニューギニアでの出来事)
- ⑤共感(エンパシー)の重要性を理解すること
(戦時、ポストンにおける日系子どもの集まり、笑顔が溢れた当時の写真)
- ⑥世界の相互関連性(interconnectedness)と持続可能性の重要性を理解すること
(戦後、収容所から離れ、広島への里帰り)
- ⑦教授者にとって、学習者の文化的背景や知性の違いを尊重すること
(1950年代、カリフォルニアでの思い出)
- ⑧過ちに責任を持ち、誠実さと信頼の重要性を理解すること
(1990年、第二次世界大戦の在米日系人の強制収容に対するブッシュ大統領の謝罪文書)

2. 研修の成果

上記「研修の内容」で説明した発表および、詳述できなかった発表も含めて、今回の大会では、「個々人」に焦点を当てた質的研究が非常に多く見られた。「移民」、「エスニシティ」、「中国ルーツ」、「中華系」といった大きな括りのなかで語られてきた人々の、「個人のストーリー」がもつ複雑さが、強く浮かび上がっていたように思う。私はこれまで、中国語圏のバックグラウンドを持つ学生の多様性を意識しながら授業を行ってきたが、今回の大会で様々な発表を聴く中で、自分の想像をはるかに超えた、多様で深い現実が広がっていることに気づいた。教授者として、学習者の文化的背景や違いを尊重すること(★4)は、ただ頭の中に考えるだけではなく、その姿勢をいかに学習者に伝えるか、また、授業の活動を通じて学習者同士が互いに尊重し合える関係をどう築いていくかといったことも、あらためて考えるべき課題であると感じた。そのために、感受性を育むような言語教育のあり方が不可欠であることを再認識した。言葉は勿論意思疎通するための手段ではあるが、それだけではなく、思考を媒介される重要な媒体でもあり、文化および社会の観念がそこに息づいている。言語を学ぶ・使用することを通じて、自身のエスニシティへの積極的な意味付け(★1)をしたり、過去の経験によって内面化されたスティグマを乗り越えて自己承認の資源を得たり、文化の複層性や文化的アイデンティティを気づき(★3)たりすることができることも、今回の大会に参加することで改めて認識した。

3. 授業への研修成果の反映状況

今回の大会に参加して、様々なことを学んだ成果は、秋学期から少しずつ授業へ反映したいと考えている。オリエンテーションでの話し方や、授業で取り上げるテキスト(記事など)の選定、指定された教科書の内容を補える説明や補足教材、そしてグループディスカッションの進め方、および課題の提示方法などを工夫し、多様化する時代にふさわしい授業のあり方を模索し、実践していきたいと考えている。

学習・教育支援センター委員長	名古屋教務課長	係